

[書 評]

阿河 雄二郎 著

『近世フランス王権と周辺世界  
——王国と帝国のあいだ』

(刀水書房、2021年8月、358頁、5,500円)

嶋 中 博 章

近世フランス王権は、内に向かって「王国」としての凝集力を強めつつ、外に向けて非ヨーロッパ世界へと支配の手を伸ばし、「帝国」としての姿を模索し始める。著者二十年来の研究を集成した本書は、16世紀から18世紀にかけてフランス王権が追求した、この双方向の動きを「共時的」な現象として捉えて、そのダイナミズムを活写し、近世フランス史像の刷新を図る。

この目的のため、著者は本書を三部に分けて三つの「周辺世界」を設定し、それらと王権との関係について、それぞれ四つの論考を充てて議論を展開する。第一部を構成する四つの論文は、王国内にありながら近世に入るまで王権の統制が及ばなかった領野——著者の言葉を用いるならば「[異]の世界」——の領有をめぐる問題を扱う。すなわち、「オーバン」と表現された外国人の処遇（第一章）、海岸に流れ着いた難破船の積荷の所有権（第二章）、狩猟権が認可されるべき身分および獲物の追跡が認められる土地の境界線（第三章）、そして、貴族を貴族として認定する基準と権限（第四章）といった問題である。著者によれば、これら「[異]の世界」はルイ14世の治世に、「王領」——たんに王が所有する領地を意味するだけでなく、最高封主としての王の諸権利をも指す——の「不割譲」および「無時効」という原則の下、各種王令や身分改めを通じて、王への帰属が確認され、王権の支配下に収められていった。

次いで第二部の諸論考は、主に海を通じて外界とつながる領域——著者はそれを「越境域」と呼ぶ——と、そこを窓口にしてフランスとその外部とを往来する人々を取り上げる。具体的には、フランスに移住したイタリア人およびユダヤ人（第五章）、タラ漁とビーヴァーの毛皮取引で大西洋を越えてカナダとフランスを行き来する人々（第六章）、ナント勅令の廃止（1685年）という危機に直面したプロテスタント（第七章）、そして、第二次英仏百年戦争（1688年－1815年）という緊迫した状況下で英仏海峡に臨んだ両国の人々（第八章）である。著者は彼らの活動を丹念に跡づけながら、国家による禁圧や戦争に伴う危険があったにもかかわらず、境界を越えたヒトやモノの出入りは絶えることがなかったことを強調する。

最後に、第三部で論じられるのは、「初期帝国」を舞台に海外進出や植民地との交易を担った組織や人々である。収められた論考では、大西洋沿岸部の集落ロシュフォールに建設された海軍工廠（第九章）、北米植民地をめぐる英国との戦争——いわゆる「フレンチ・アンド・インディアン戦争」ないし「カナダ征服戦争」（1754年－60年）——を遂行した閣僚および軍人（第一〇章）、そして、ナポレオン時代まで存続し「帝国」を牽引した奴隷貿易にたずさわった貿易商人（第十一章、第十二章）に光が当てられる。そこから浮かび上がるのは、大航海時代にはライヴァルたちに遅れをとりながらも、ルイ14世の親政期を境に「海洋大国」へと急成長を遂げ、英国との抗争に敗れて北米植民地を喪失したあとも海外進出の情熱を燃やし続ける海洋国家フランスの姿である。

著者は「歴史研究の醍醐味は、長いタイムスパンのなかで変化する相をいかに捉えるかにある」と語る（7頁）。近世の300年を通じて、フランスが王の下に統合された王国の樹立と、植民地獲得を通じた帝国の建設とを並行して実現してゆくさまを、鳥の目と虫の目を使い分けて描き出した本書は、まさにその醍醐味を存分に味わわせてくれる。一方で著者は、「ある一つのテーマをじっくりと奥深く探求するという手法をとらなかったため〔……〕表層的な説明や理解に留まったのではないかとの自省の念がある」と反省を口にするが

(305頁)、むしろ内的統一と外的拡大という二つのベクトルの先に、混沌としながらも力強く脈動する「周辺世界」という共通項を見出し、そこに多方面から切り込むことで、ともすると硬直的で停滞した時代とされがちな「アンシアン・レジーム」に血の通ったイメージを与えることとなった。

問題は、この内外の「周辺世界」に介入する王権の意図と役割を、どの程度評価すべきかにある。その点、終章で提示される本書の結論は、やや王権に重心を置きすぎているように思われなくもない。例えば、著者は王国の統合に関して、王権が海浜や森林といった「無所有の領域まで支配下に収めることにはほぼ成功し」、外国人や貴族に対しても「形式的な面も含めて、すべてが王権の承認のもとに存在を許容された」と結論づけている(302頁)。また、帝国の形成についても「近世の王権がヨーロッパの覇権と海外進出を並行して進めた」とまとめる(302頁、傍点は引用者による)。

しかし、本論を通読して印象に残るのは、王権の意図とは無関係に、あるいは王権の裏をかいて躍動する人々の姿ではないだろうか。王命を無視して難破船掠奪に狂奔する沿岸住民(第二章)、禁令を破り「王の狩場」で獲物を追う密猟者(第三章)、「貴族改め」の嵐が過ぎるのをじっと待つ偽貴族(第四章)、追放令後も都市当局の黙許を得て貿易を営むユダヤ人やプロテスタント(第五章、第七章)、特権会社の黙認の下で奥地に分け入りビーヴァーの毛皮を集める「森を駆ける人」(第六章)、国家間の紛争をもものともせず白昼堂々と密貿易にいそしむ英仏海峡沿岸および島嶼部の住民(第八章)、破産の危険を冒してまで奴隷貿易に賭ける私的な貿易商人(第一〇章、第十一章)、彼らこそが本書の主役である。実を言えば、著者自身、彼ら「アウトロー」や冒険者に魅せられ、「こうした神秘的で幻想的な人間群像」に「周辺世界探求の醍醐味や魔力」を見出しているのだ(306頁)。近世フランスの特質は、「周辺世界」を統制し支配下に収めようとする王権の強固な意志と、その統制・支配をかくぐって逞しく生きる臣民の活力との懸隔の大きさにこそあるのではないだろうか。

ともあれ、本書は旧来の「アンシアン・レジーム」のイメージを覆す幾多の

知見に満ち、新たな研究の種がいくつも散りばめられている。その種を育て開花させることが、著者から私たちに託された課題であろう。